

圖書版

島木健作全集

第六卷

島木健作全集

第六卷

国書刊行会版

島木健作全集 第六卷

昭和51年7月20日 印刷

昭和51年7月25日 発行

定価3800円

著作権者との
申合せにより
換印省略

著 者 島 木 健 作

著作権者 朝 倉 京

発行者 佐藤今朝夫

制作・尾沼 汎

〒170 東京都豊島区巢鴨3-5-18

発行所 株式会社 国書刊行会

電話 (917)8287(代表) 振替・東京—5—65209

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

第六卷 目次

續・生活の探求	一
解題	三六七

續・生活の探求

つねの年にも増して寒さもきびしく、風も吹き荒れることの多いその年の暮れであつた。この地方は、北と東に向つて開き、海も近く、そこから吹き上げて来る風は、杉野たちの部落の後ろの山で行き止まりだつた。晝も夜も山に鳴る風の音に包まれながら、山裾の地のわづかなくぼみに、杉野の家はひっそりとしてゐた。家のなかには、平和な、物靜かな空氣にあたたまつてゐた。舊曆の節季までにはまだひと月あつたが、その節季への備へがすでに一應はととのつてゐたからである。

今年の葉煙草收納の結果は、先づいいとしなければならなかつた。十二月の初めに豫定されてゐた葉煙草の收納は、役所の都合で月の終りに變つた。何月何日に幾百個の包を收納せよとの示達が、役所から村の耕作者組合にあり、組合ではこの包數を各組合員に割り當てる。その前後から夜晝休みなしの葉の撰別作業が始まる。米國種葉煙草の葉分けは三通りだつた。幹の最下部の二三枚が土葉、土葉の上部の四五枚で肉の薄いのが中葉、中葉の上部の肉の厚い葉全部が本葉であつた。この三通りに區分される、乾燥した幾萬枚の葉を、その各區分に從つて、一枚一枚、その形態や葉肉の厚薄や乾燥の工合や彈力や色澤や損傷の程度やによつて品位を鑑別し、品質の近いものどうしをまとめて一つ束にするといふ葉撰みの作業は、熟練を要することであつた。土葉は三十枚、中葉は二十枚、本葉は十五枚を以て一把とし、一把のうちの一枚で葉柄の上部を包み、その端を螺旋形に巻き附け、結束する、これが規則である。杉野の家の五人のうち、一番の手利き

は一番年少のお道だつた。いくら経験を積んでも敏速に行かぬものもあるが、お道のは熟練といふよりは勘のするどさだ。山のやうな葉を、人の倍の速さで、次々に處理して行く。彼女がゐなければ、杉野の家でも、ほかの家がよくさうするやうに、熟練者をその期間中傭はなければならぬかも知れなかつた。駿介も、お道の側に坐つて、見まねで少しづつおぼえて行つた。仕事に熱してゐる時のお道は、いつも妹として見てゐる彼女とはちがつた。仕事は彼女をおとなにした。わきから言葉をかけることもなんとなく遠慮されるきびしさを持つてゐた。

結束した葉は、葉製の薦の上に、兩方から十把づつ、葉の先きを互ひ違ひにして、並べた。つまり二方積一段二十把になるわけだ。その上に何段も積み重ねて行つた。何段といふ規定はなかつた。規定は目方によつた。かうして積み重ねると、その上からも下のと同一薦をあて、縄で固くしばつてそれを一包とした。一包は五疋以上三十疋以下といふことになつてゐた。煙草耕作はその最初から持たねばならなかつた獨特新細々しい規則から、この包装といふ最後の仕上げの時になつても免れることは出来なかつた。薦は葉製の新しいものに限り、古いものは決して使へなかつた。それもどんな葉製の薦でもいいといふのではなく、「一手二本宛四ヶ所編み縦二尺五寸横二尺二寸一枚の重量三百瓦内外」のものといふ風にきまつてゐた。また縄は、「太さ徑曲尺三分とし撚數曲尺一尺の間二十撚内外とす」ときまつて居り、その掛方も、「一筋縄にて横三ヶ所縦一ヶ所とし各一重廻しとなし三寸内外の餘裕を存し上部に於て堅く結束すべし」ときまつてゐた。かうした指示事項を見てゐると、駿介は頭が痛くなつて来るほどだつた。云はれてゐる通りに、薦や縄を編むといふことも、駿介にはまだ自信がなかつた。すべてこれから最初から最後まで細々しさの一切が、本來的に煙草耕作に結びつかねばならぬものかどうかは、駿介にはわからなかつた。しかし、煩雜を煩雜とも思はぬらしく、平氣

で、黙つて事を片附けて行く父のやうになることが、今の自分にとつては先づ何よりも必要だと思つた。

包装が全部すんで、すべての作業が終つて、包を積み上げた夜は、さすがに感慨が深かつた。春から今までの辛勞のすべてが思ひ出された。しかしその思ひ出も今は甘かつた。あとはこの十四包が、いい値で引き取られて行くことを、心から祈るばかりである。今年は一段歩足らずだから、積み上げた包もわづか十四だ。しかし來年はこの三倍を積むことが出来るだらう。

いよいよ明日は收納日といふ日の前日、村の耕作者組合では、全組合員の荷をトラックに積んでN町の收納所に搬入した。荷は、搬入場に、各個人別にまとめて積んだ。そして各包毎に、村名、氏名、納付月日、受付番號、納付包數等をそれぞれに書き込んだ荷札をつけた。

收納の當日、駒平と駿介は朝六時にはもう出かける仕度をした。收納は八時から始まる豫定だつた。しかしそれまでに荷を提出順に整頓し、遺漏の無いやうにしておかねばならなかつたから、早く向うに着くことが必要なのだ。

朝飯をすますと、駒平は裏口へ出て行つて、空を見上げた。しかし冬の六時はまだやうやく明け初めばかりだつた。

「どうかな。今日の天氣は。」

彼は戻つて来て、相談するやうに駿介を見た。

「さア……いいと思ふけどなア、今日は。寒いし、それにかう霧がかかつてゐるから。」

この月に入つてから、餘り感じたことのなかつたこの朝の寒さだつた。さつき山羊の小屋へ行つた時、駿介の足の下では、霜柱がぎくぎく鳴つた。井戸端の桶には、薄氷が張つてゐた。

「さうやなあ。よからうとは思ふんぢやが、靄の濃い日は朝でつかりですんぢまふことも珍らしいはないよつてなあ。」

村のことだから、新聞の配達日は上つてよほどしてからだつた。天氣豫報を見ようにも見ることは出来なかつた。

間もなく近くに住む組内の二人、石黒と菅原とが誘ひ合してやつて來た。彼等が寄ることはわかつてゐたので、駒平と駿介は待つてゐたのだつた。彼等は互ひに朝の挨拶を交し合つた。

「おつさん、どうやらうなあ、今日の天氣は？」

挨拶がすむと、石黒が最初に云つたのはやはり天氣のことだつた。彼等二人は、ここへ來る途中もそのことを話し合つて來たに違ひなかつた。

「大丈夫や。昨日もあなええ天氣やつたに。——あんさんも今日は行きなさんやろ？」と菅原が訊いた。

「ええ、行きます。わたしは何しろ初めてなんだから。收納の模様も見ておかんことにや。」

「さうやとも。よつく見といて、何ぞ役所に云ふことでもあつたらまた願ふて下され。——ぢやあ、往なうぜ、みんな。」

「うん、往なう。」

彼等は自轉車を曳いて、下の道まで歩いた。

「何時頃にすむんです？」

「さやうさなあ、二時にはすみますやろ。この頃は日が短かいよつて、さう遅うなつちや、後になつたものはやりきれんからのう。」

彼等が氣にしてゐるものは一に太陽の光線だつた。朝起きた時から今日の天氣を問題にしてゐるのも全くそのためだつた。葉煙草の賠償價格は鑑定官の鑑定によつてきまつた。鑑定は明るい光線の下で爲されることが絶対に必要だつた。當局でもその點には充分な考慮を拂つてゐた。收納所の建物の周圍は全部ガラス窓になつてゐた。殊に鑑定官が立つ鑑定臺の前の窓は、彼の腰から二間位の高さまで、總ガラス張りになつてゐた。しかしそれによつても尙、雨天や曇天の日を、晴れた日と同じ條件の下におくといふことは無論出来なかつた。晴れた日の明るい光りの下では、葉煙草は、百姓達の言葉で云へば、「見てくれがいい」のやつた。晴れた日とさうでない日とでは、葉は一等級を上下すると云はれてゐた。賠償金一疋一圓四錢の三等品になつたかも知れないものが、その日がたまたま雨天だつたといふだけのことで、賠償金一疋七拾四錢の四等品と認定されねばならぬとしたら、生産者にとつて諦め切れぬことではないか。

收納所までは自轉車で四十分の道のりだつた。彼等は道の途中で他部落の者とも一緒になつた。向ひ風のなかを彼等は元氣よく飛ばして行つた。走りながら聲高に話して行つた。すぐ前と後ろに連なつて話しても、その話聲を途中で切つて飛ばして了ふやうな風の強さ冷たさも、今日の彼等には一向苦にもならなかつた。風が出て來たといふことは、空がからツと吹き拂はれ、空氣の乾燥した、寒い明るい日を思はせて、却つて彼等を喜ばした。

やがて彼等は收納所に着いた。着いて暫くすると係員の手から、一人一人に、番號の附いた木札が渡つた。この木札は、各人が最初に鑑定に出す包に附けてやるものだつた。この木札は鑑定順を示してゐた。番號の早さ遲さにも何となく拘泥して彼等は互ひに仲間の番號を聞き合つたりした。

各自の荷は、各自がきめた順番によつて鑑定に送り出すことになつてゐた。それで彼等は昨日の搬入場へ

來て、自分達の荷を調べ提出順をきめるのだつた。その頃搬入場へやつて來るものはしかし彼等だけではなかつた。明日鑑定を受ける者達がもう荷を運んでやつて來てゐた。天井の高い明るい建物の中に微塵が躍つて、薦の藁の匂ひが仄かにしてゐた。たたきの上に荷の落ちるやはらか味のある鈍い音。入り亂れる人々の足音。彼等はお互どうし餘り口をきかなかつた。何となく急ぎ立てられるやうなざわめきのなかに自分の荷のことを思つて、彼等はだんだんに興奮して來るのだつた。

日はいつか高く上つてゐた。空は吹き拂はれたやうに晴れてゐた。彼等が豫想したやうな天候になつた。りりりりりりりり……りーん。

その時よく冴えた鈴すずの音が乾いた收納所のなかの空氣をふるはして響き渡つた。八時の鈴であつた。鑑定開始の合圖である。係員や人夫が出て來て、それぞれの持場に着いた。

駿介は、最初に荷を送り出さうとしてゐる一人の後ろに近く立つて、鑑定の行はれるさまを見ようとしてゐた。

十四間に十二間の收納所の建物は、ほぼ中央で、黒いカーテンに仕切られ、こつち側が事務所や搬入場で、向う側は鑑定所に荷造場だつた。駿介達はそのカーテンの手前に立つてゐた。作業中はカーテンが引き絞られてゐるから、鑑定は少し離れて眼の前で行はれることになる。駿介達が立つてゐるすぐ左の方に、眞中にもう一本木が渡してある點は梯子とは違ふが、梯子によく似てもつと長い形のものが、コンクリートのたたきの上にぢかにおいてある。これは送り臺であつた。送り臺の上にはもう荷が鑑定を受ける順序でならんでゐる。端の方には、荷主達が、緊張した顔で待つてゐる。

送り臺が押されて行く向うには、直徑二間半の大きさで、圓形にレールが走つてゐる。鐵製のトロツコが

その上を走る。レールを前にして、その左の方に鑑定臺がある。二人の鑑定官と一人の書記とが、鑑定臺を
はさんで待つ。

ガラガラガラガラと音を立てて、人夫がトロッコを送り臺の方へ走らせて來た。

「それッ。」と、口には出さないが、その氣構へで、番になつてゐる荷主とはかの者とが一緒になつて、送り臺を前に押しやつた。送り臺の上の荷は、すでに包装の繩が解かれ假結びになつてゐる。人夫はその荷をトロッコの上へ移し、ガラガラガラとトロッコはまた廻つた。鑑定臺の前まで行くと、待つてゐた二人の下手間の女がそれを引きとめた。黒い上つ張りを着た彼女等は素早く假結びの繩を解き、包装の薦を取り去り、積まれた葉を中頃から左右に開いた。同時に傍に立つた二人の鑑定官は、葉の束を一把づつ手に取つて見た。いかにも慣れ切つたさまでちらつと一瞥し、葉の裏を返してまたちよつと見て、すぐにもとの所へおいた。一人はそれきりだつたが、他の一人は積んだ葉の下の方からもう一把を取つて見た。見終ると二人は別々に鑑定臺の上の釦を押した。すると二人の反對の側に臺に向つて腰をかけてゐる書記の前に細長い箱がおかれ、その箱の中から外へ、ぼーつへ仄かな晝の電燈の光りがもれた。箱の中を見て、書記はだまつて臺の上の紙に何かを書き込む。それを人夫に渡す。トロッコはまたガラガラと走つて荷は今度は右手鄰りの量目係の方へ送られて行つた。

百姓達は硬く緊張した表情でこのさまを眺めてゐる。駿介のやうに今年始めてこの場に臨むといふものは居さうになかつたが、皆はじめて見るもののやうな眞剣さであつた。これら一連の作業は全く敏捷に、素早く行はれた。三十秒ぐらゐの間のことだつた。はじめての駿介は全く驚かされて了つた。あまりにあつけないく、ぼかんとさせられて了つた。彼は水の流れのやうになめらかに進む統一ある仕事とその素早さに感心す

るといふよりは何か不満であつた。彼は鑑定といふ仕事をもつと念入りに行はれるものだと思つてゐた。耕作者が満足するほど念入りにやつてゐたら山ほどの荷をあとに残して日が暮れて了ふだらう。日は何日あつても足りないだらう。念入りは鑑定には必ずしも必要ではなくて、必要なのは熟練なのだ、そして熟練は當然時間を短縮する——しかしそれにしても尙駿介には早すぎる氣がした。あんなに意氣込んで來たことがかうも簡単に片附けられたことで、ふいに肩透しでも食つたやうな氣がした。彼には不當の事のやうにさへ思はれて來るのだつた。あの一包にこめられたあらゆる辛勞が彼の心の底にはあるからだつた。

「早いんだね、随分。」と、駿介は、トロツコの音が止んだ時、小聲で傍に立つ石黒に囁いた。

「ああ、どうしても慣れてるけんう。」その言葉からは石黒の感情は汲み取れなかつた。「一時間に百五十包からの鑑定をすますといふんぢやけに。一段歩が六分か七分ぢやさうな。えらいもんぢや。」

「あの釦を押すのは何かな。」

「あの釦を押すな、するとあの書記の前の箱の中の豆電燈に明しがつくんや。豆電氣はこつからは見えんけどな。電氣は赤と白とでな、こりや本葉と中葉とを區別するんぢや。その前には等級板があるけに、明しがつきや、こりや本葉の何等ぢやこりや中葉の何等ぢやいふことがわかるんや。」

「ふん……成程な。二人は相談し合ふといふことはしないんだね。何等にきめたかをお互ひに知らないんだね。」

「知らんのぢや。鑑定官が二人あるな正確と公平を期するためちうことになつとるんやからね。」

「ぢやあ、もし二人が一致しない時は？」

「そんな時は書記が知らせるけに、見直すといふことになるんや。」

しかし石黒が一層聲をひそめて話すところによれば、さういふことは殆ど無いといふことだ。鑑定官がそれほど熟練してゐるとも云へるが、一つにはまた、鑑定官の一人が主任で、他は從屬的な存在だといふことにもよつた。つまり主任の鑑定が動かし難いものになつてゐるのだ。書記は多くの場合主任の鑑定にそのまま従ふ。

送り臺は引き續き押しやられ、トロツコは走り、それはまたもとへ戻り、葉煙草の包は次々に消化されて行つた。百姓達は送られて行く荷を見、また鑑定官を見た。眼鏡をかけ髭のある鑑定官はだが彼等の方を見ることはなかつた。彼等は無用の言葉を云つたり、またどんな意味の笑ひにしる笑ひを見せたりすることはなかつた。彼等は周圍に對しては殆ど無關心で、車が軌道を行くやうに、きまりきつたことをきまりきつたやうにやる時の事務的な冷たさを持つてゐた。その冷たさといふものは、彼等の役目柄から來るおのづからなものであり、また仕事に慣れ切つてゐるといふところから來るものであり、鑑定に對する高ぶりとも云へるほどの強い自信から來てゐるものでもあつた。仕事に敏速であることは鑑定官の生命であり、誇りだつた。鑑定臺の後ろ、窓に近く、念のために等級別の標本が備へてあるが、疑はしい時に標本に照らし合して見なければならぬなどといふことは、その道の専門家ともあらうものの恥であつた。二人のうち若い方の鑑定官に見られる一種の誇張は、彼が人々のさまざまな眼を感じて居り、自分の一舉一動を強く意識してゐることを示してゐた。

百姓達の關心は自分の荷の運命についてまはつた。だから、荷が鑑定官の手を離れ量目係の手に移ると、彼等の眼も亦そこへ移つた。ここでは三人が自動看賞を取りまいてゐた。二人は量目係、一人は記帳係だつた。鑑定の方から廻つて來た紙を人夫の手から受け取ると、記帳係は讀みあげる。

「中葉の四等！」

その時はもう包を看貫にかけ終つた量目係は言下に應じる。

「二十キロ！」

記帳係は、「ええ、二十キロ！」と、復唱して記入する。

「本葉の三等！」……「十五キロ！」……「ええ十五キロ！」——淀みなく、二人の聲は一つのリズムを以て相和して行く。等級が聲高く讀み上げられる毎に、見てゐる百姓達の間にざわざわが起る。

彼等はここへ來てはじめて自分の包が何等級になつたかを、はつきり知ることが出来るのだ。彼等は眼に見えて興奮して來る。彼等は思ひ思ひの批評をはじめめる。彼等は鑑定官の鑑定に對して、自分達の評價を對立せしめずにはゐられない。

「あれが四等かいや！ さつきはあななものが三等やつたのに。あの三等より今の四等の方がずっとええやないか。」

その、「あの三等」の荷主がすぐ傍にゐることをも彼等は忘れて了ふ。まれに一等が出たりすると、ざわめきは大きくなる。誰だ、誰だとかたきでも探すやうにさわぎ立てたりする。豫想外の成績をあげてひそかに喜びの聲を胸のうちにあげるものもあつたが、やはり不満をもらすものの方が多かつた。自分の包の等級がきまつて了ふと、彼等は自分の内に何かごつそりと穴があいたやうな氣持がした。何か一言云はねば氣がすまぬやうな、これだけですんで了ふといふ法はないと云ひたいやうな、さうかと思ふと萬事すんだとがっかり諦めて了ふやうな氣持でもあつた。さういふ氣持の底にあるものは鑑定に對する疑惑と不満だつた。道々ひそかに考へて來た自分の評價には自信があつた。その自信は容易には棄て得なかつた。こんな筈はない

と思ふ。そこにさうして立つてゐるまも實に多くの考へが彼等の腦裡を駆けめぐる。

（どうしよう？　云つたものか、それとも黙つてゐたものか？）彼等はそれについてとくに強く考へる。不服の申立ての道は開かれてゐる。再鑑定を云ふことが出来る。云はうか云ふまいか？

ためらひながら向うを見ると、そこに立つ鑑定官の姿といふものは大きく見える。云ひたい口をも強張らせて了ふやうな何かがある。（憎まれては損だ！）と彼等は考へる。しかも再鑑定を云つて、取り上げられたとして、その實際の結果が殆んど云ふに足らぬものであることを、彼等は餘りにもよく知りすぎてゐる。それでも、たとへわづかでも、評價額が増加した場合はいい。前鑑定以下になつた場合にはどうだらう。費用までも自分が負はねばならぬ！

しかし豫想外の好成績をあげるものもなくはなかつた。そして杉野の荷はその少數なものの一つであつた。彼の荷は少なかつたから、ほんの數分間で片附いて了つた。本葉は殆どが三等で、なかに四等が少しまじつた。中葉は四等が大部分だつた。土葉は六等七等だがこれは僅かであつた。そして一疋當りの賠償額、三等は壹圓四錢、四等は七拾四錢、五等は五拾錢、六等は參拾錢、七等は拾四錢だつた。

「ほう！」と、この結果には駒平も満足らしくほほえんだ。今年の出來は杉野の家としては例年になくよかつたのだが、三等がかう澤山出ようとはちよつと豫想外だつた。わづかの耕作段別だから、金額から云つて幾らの違ひでもないが、何と云つてもこれは嬉しかつた。石黒や菅原やその他部落の連中が、喜んだり羨ましがつたりした。

もう十一時に近かつた。するとその頃になつて場内が俄かに暗くなつた。日が陰つて來たのだ。ガラスに圍まれてゐる收納所の内部は明暗の變化の度合が大きかつた。これから荷を出さうといふ人々は不安な面持